校長室だより～燦燦～ №６６１

創造性

2022.11.29

日本人は創造性が足りない。これは、よく言われることである。では、創造性を生むには何が必要なのか。創造性は無からは生まれない。知識や準備があるからこそ、アイディアは生まれる。

ブラジルの有名なプロサッカー選手に、ネイマールという世界的なプレーヤーがいる。ネイマールの実験というものがある。他の選手とどこが違うのかを調べるために、ある大学の研究室が彼を呼び、試合中の映像を見せながら脳波の動きなどを調べた。

その結果、彼が並のプロ選手とどこが違うのかが分かった。一つは彼がプレーのパターンを他の選手よりもたくさん覚えていることである。第二は、各プレーシーンで覚えているパターンのうち、どれを使えば最も適切かを判断する能力である。第三は、判断のスピードである。

つまり、最初は学習や練習なのである。それによってはじめて独創的なプレー、すなわち第二、第三が可能になる。これは、スポーツに限らず、学問や事業で成功する上で大切なことである。

ネイマールやリオネル・メッシ、クリスティアーノ・ロナウドなどのプレーを見ていると、天才的なひらめきのようなものを感じるが、それだけではないようである。小さい頃からの積み上げがあるのだろう。

創造性というと、自由に伸び伸びとしたものがイメージされる。だが、しっかりとした土台が必要なようである。そうであれば、日本人にも向いていそうなものである。やはり、教育の問題なのだろうか。

創造力とは、新しいものをつくり出す能力である。特に、これからの時代に必要とされる力である。課題に対して、自分なりの答えを見つけ出すことができる能力である。創造力に欠ける人は、前回と同じ方法、前年度踏襲、従来通りに物事を進めがちになる。それでは、会社も社会も発展はしない。情報を収集し、分析した上で、新しい価値をつくり出す力が求められている。

学校も同じである。学校は、創造性を持ち合わせているだろうか。残念ながら肯定しづらい。どちらかというと、創造性に乏しいのではなかろうか。今までの学校では、正しい答えにいかに早くたどり着くかが求められ、いかに創造するかについては学んでこなかった。

ところが、社会人になった途端に、これまでにないような斬新なアイディアを求められる。従来、創造性は天賦の才能だと思われがちだった。ゆえにコンプレックスの元にもなりがちだった。だが、そうではなかった。誰でも創造的になり得るのである。創造性は努力して磨くことができるのである。そのことが明らかになってきた。

これからの学校には、創造性が必要である。旧態依然とした教育から脱却を図り、新しいアイディアを出しながら、少しずつ変わっていかなければならない。そうしないと、いつまでも日本人は変われないだろう。教育の力が必要である。